

冤罪で追放された王子は最果ての地で

美貌の公爵に愛し尽くされる

く凍てついた薔薇は恋に溶かされるく

Characters

*Enzai de bibou sareta uji no
sahate no chi de
bibou no kenshaku ni aishi tsukasareru*

アルベルト・ グナイゼン

ロサーナ王国の
第二王子。無実の罪で
廃嫡された。生まれつき
病弱だが、聡明で優しく
誠実な性格。

エーリヒ・ライエン

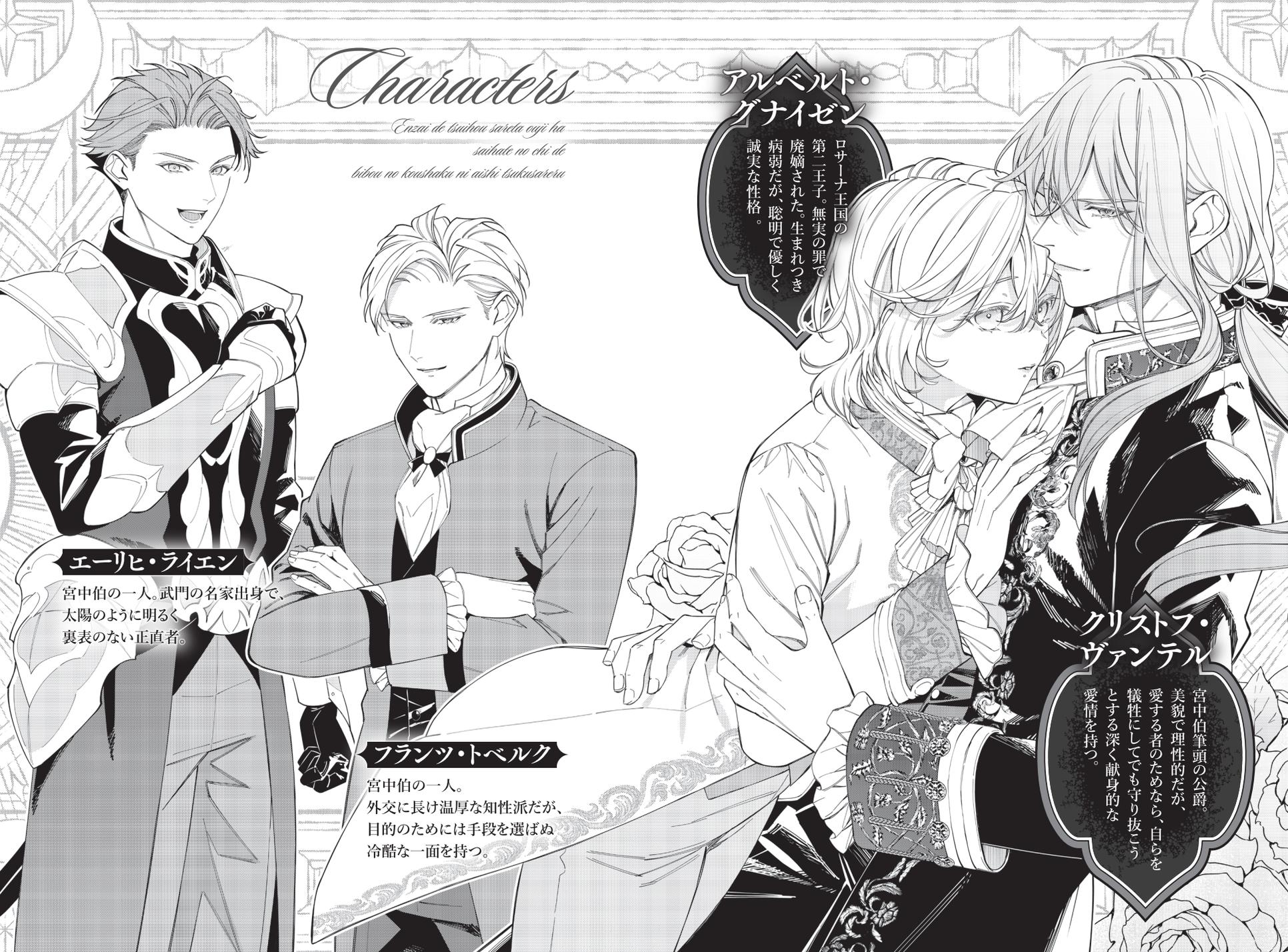
宮中伯の一人。武門の名家出身で、
太陽のように明るく、
裏表のない正直者。

フランツ・トベルク

宮中伯の一人。
外交に長け温厚な知性派だが、
目的のためには手段を選ばぬ
冷酷な一面を持つ。

クリストフ・ ヴァンテル

宮中伯筆頭の公爵。
美貌で理性的だが、
愛する者のためなら、自らを
犠牲にしても守り抜こう
とする深く献身的な
愛情を持つ。



目次

冤罪で追放された王子は最果ての地で
美貌の公爵に愛し尽くされる
く凍てついた薔薇は恋に溶かされるく

番外編 春の来訪者

冤罪で追放された王子は最果ての地で

美貌の公爵に愛し尽くされる

く凍てついた薔薇は恋に溶かされるく

「なぜ、お前がここにいる？」

その言葉をすぐに口にすることはできなかった。
体が冷え切って歯の根が合わない。

王宮の誰よりも清廉で美しいと言われた男は、王である父の年の離れた従兄弟で宮中伯の一人だ。
まだ年端も行かぬ子ども頃に出会い、いつも優しく微笑んでくれた。

交わす言葉は少なくても、互いの心には信頼という名の心が通っている。

ずっとずっと、そう信じてきたのに――

『どんな哀しみの時も、貴方のそばにいる』

兄を亡くして絶望の淵にいた時の言葉がよみがえる。あれは全てまやかしたのか。

いつも心地よい言葉を舌に乗せていた、そんな他ならぬお前自身が……

――私から全てを奪って、この最果ての地へと追いやった。



それは、今から一月前のこと。

大広間に集められた諸侯の前で、文官が一枚の書状を読み上げた。

「王太子、アルベルト・グナイゼン殿下。本日をもってその御位を廃し、北部レーフェルト凍宮にお移りいただきます」

まさか、自分の名が読み上げられるとは……

廃嫡の宣言はあまりに唐突で、耳にした言葉が信じられなかった。

呆然としているうちに、次々に罪科が読み上げられる。

「一、王太子でありながら政治・軍事への関心を全く示さないこと。一、国教以外の宗教に傾倒したこと。一、婚約者を軽視し、身分を軽んじて平民を近くに置いたこと……」

「なにを言う！ いつ私がそんなことを！」

怒りのあまり、思わず椅子から立ち上がった。

「殿下、これまで月初めの会議に一度としてお見えにならず、軍事訓練にもお出ましになりませんでした。どうして関心があると申せましょう？」

「国教よりも、平民どもの間でひそかに流行っている宗教に進んで教えを乞うておられるとか」

「御婚約者のノーエ侯爵令嬢のお心を踏みにじり、平民の娘を宮中に置かれ、お立場を軽んじたと聞き及んでおります」

居並ぶ宮中伯たちの口から次々に非難の声が上がる。どれもこれも、全くの言いがかりにすぎない。

帝王教育が始まったばかりなのだから、会議に立ち会うのは早いと言われた。軍事訓練のように荒々しいものはお体に障る。時を見て御覧になれば十分とも言われてきた。

少しでも顔を見せた方がよいのではと言えば、これから時間はいくらでもある。焦ることはないと言われた。

……そうだ、不安だった時はいつでも尋ねてきたのだ。相談役であった二人の宮中伯に。

最も信頼を寄せた男——ヴァンテルは、私の真正面の席に悠然と座っている。

私は宮中伯たちから非難された言葉に、一つひとつ異を唱えた。

教会には何度も赴いて祈りを捧げ、大司教たちと対話してきた。

市井の様子を見るために、こっそりと平民たちの暮らしを見に行つたことはある。だが、馬車から通りを眺めただけで直接言葉を交わしもしなかった。

そして、婚約者であるノー工侯爵令嬢。

『どんなにお忙しくても様々な贈り物を御用意くださるお心遣い、ありがたく存じます。でも、どうぞ御無理をなさらないで。またお茶を御一緒できれば嬉しいのですが……』

金の髪を揺らし、頬を染めて微笑む少女の姿が目につかぶ。彼女に会う暇すらろくになかったのに、他の誰をそばに置いたと言うのか。

だが、今、私がどんなに言葉を尽くそうと何の意味もない。

そのことが理解できたのは、目の前に書状が突きつけられた瞬間だった。

王太子アルベルト・グナイゼンはいちやく廢嫡の請願書。

文言の下には十人の宮中伯の名が連ねられ、一番上に筆頭としてクリストフ・ヴァンテルの名があった。

国の政を司る宮中伯は全部で十二人。たとえ残る二人が力を尽くしても、決定は翻らない。

「殿下、御身の今後の生活は今までと変わりないことをお約束します。速やかに凍宮に移る御準備を」

「なぜだ、ヴァンテル！ どれも全くの偽りなのに！」

ヴァンテルが立ち上がり、まっすぐに私を見た。

冬の湖のように青い瞳は、これまで見たこともないほど冷たかった。信頼に満ちていた瞳が、今や私の全てを否定する。

衝撃でなにも語れぬうちに、近衛騎士たちが私の両腕を掴んだ。

「凍宮への供は本当についてきたいと思ってくれる者だけでいい。もう二度と、王都に戻ることは叶わないのだから」

長年仕えてくれた者たちにそう告げると、それぞれが頭を垂れ、次々に泣き崩れた。

身辺の支度に与えられたのはわずか一週間。準備が出来次第、旅立たなければならぬ。

「遠慮することはない。父母や妻子がいる者は王都に残れ。己が年老いた者もだ」

赤子の頃からそばにいた乳母も侍従長も王都に家族がいる。常春の都に慣れた者たちが、彼の地の寒さに耐えられるとは思えなかった。

「口惜しゅうございます。尊い御身がなぜ、このようなことに……。日々、お体を削ってまで国のために尽くしてこられたではありませんか！」

すずり泣く乳母の口から、怨嗟の音が漏れる。

——なぜ？

そうだ、一体なにがいけなかったのだろう。

私はロサーナ王国の第二王子として生を受けた。生まれつき体が弱く、ろくに表に出ない暮らしをしてきた。私と違って兄である前王太子は健康で賢く、愛情深い人だった。

全ての歯車が狂ったのは、その兄が落馬して命を失った時からだろうか。

王宮の片隅で静かな生活を送っていたのに、突然王太子のための東の宮殿に移された。朝から晩まで帝王教育が施され、将来の王妃に相応しい令嬢が婚約者にと選ばれる。

私の意思などどこにもなく、聞いてくれる者もない。

だが、それでもよかった。

求められるならと必死で努力した。忙しければ忙しいほど、兄を失った悲しみを考えずに済む。

わずかな睡眠を長椅子でとりながら、日々の学びに明け暮れた。

勉強の合間には婚約者への文や贈り物も欠かさなかった。たとえ政略の相手であつても、誠意を尽くしたい。いつか心を通わせることができたらと淡い望みを抱いていた。

しかし、そんな気持ちは私の独りよがりすぎなかった。

美しい婚約者の口からも証言がなされたと聞く。

……平民の娘をそばに置き、国母となるべき女性を蔑ろにしたと。

私のなかが彼女を偽証に走らせたのか。いつの間にか嫌われていたのだろうか……

問うことも答えを聞くこともできず、私たちの婚約は解消された。そして、王宮を旅立つ日がやってきた。

長く病に伏した父王との面会さえ、最後に一目会うことも叶わなかった。

晴れ渡る青空がどこまでも続く日。

私は生まれて初めて王都を離れ、北の果てに向かった。馬車を守るのは王族に従う近衛騎士ではなく、これから凍宮を守る任に就く騎士たちだ。

沿道に舞う花びらだけが、まるで別れを惜しむようにいくつも窓から入ってきた。



ロサーナ王国の最北にある壮麗な離宮は、見渡す限りを雪と氷に囲まれている。

その名をレーフェルト凍宮という。

北国から嫁いだ妃のために、何代も前の国王が建てたものだ。温暖な王都フロイデンは高地に造られた常春の都である。「ここには雪がない」と叙しがった寵姫の慰めに、時の王は莫大な金と人を使ったと聞く。

豪華な造りの宮殿は贅を極め、内部の装飾の一つひとつにまで手がかかっている。

周りは雪と水でも、一步宮殿内に入れば快適で暖かな空間が設えられている。それでも王侯や貴族たちは、彼の地に行くのを拒む。

わずかな春と夏の他は常に寒さと戦わなければならない。周囲は享樂とは無縁の地だ。遙か南、この世の楽園と謳われた王都を捨て、誰が最果ての地を望むというのだろう。

フロイデンからの馬車旅は三週間ほどかかった。

北の地は驚くほど王都と気候が違ふ。厚い雲に覆われた北の離宮に到着した時、周囲にはたくさんの雪が舞っていた。あとから聞けば、例年よりずっと雪の降るのが早い年であったという。

凍宮の正面玄関には、宮殿長をはじめ、ずらりと騎士たちが並んで私を迎え入れた。

案内されたのは、凍宮を造営した王の妃が使っていた部屋だ。女主人のための部屋は凍宮で最も豪華だという。

自室の両隣には、寝室と侍従たちの控える部屋が続く。長年使われていなかったとは思えないほど、部屋の中は清潔で美しく整えられていた。執務室に応接室、他に用意された部屋も同様だという。

一際目を引いたのは、自室からすぐに外の露台に出られる大きな扉だった。厚い硝子のはまった両開きの扉の向こうは一面の雪。暖炉には十分な薪がくべられ、窓際には豪華な窓掛けがかかっている。調度品はどれもが一級の品であり、全てが王宮に勝るとも劣らない。

……全て今の私には必要ないものばかりだ。

ため息を一つこぼしながら、厚手の旅装を解いた。

「お疲れになりましたでしょう」

「私だけではない。そなたも疲れただろう……」

侍従のノクスは首を横に振り、柔らかな絹地の服への着替えを手伝ってくれる。

寝室には金の縁に色とりどりの宝石がはめこまれた大きな鏡があった。半身が映り込む姿見は磨き抜かれ、麗しい妃が使うに相応しい品だ。

だが、そこに映った自分はひどくやつれていた。

銀に近い金の髪は艶なく肩の上で揺れ、大きな空色の瞳は不安に沈んでいる。ろくに陽に当たらない肌の色は真つ白で血の気がない。風が吹けばすぐに飛んでしまいそうだった。

王都で何度も美しいと言われたことは、やはりただの世辞だったのだと思う。

ノクスは少しでも早く私を休ませようとしたのだろう。すぐに温かな食事が手配された。

凍宮での初めての食事は、驚くほど美味だった。

柔らかく煮こまれた鶏のスープに少量ずつ用意された温野菜と麦粥。弱った体に滋養が染み渡る時間をかけて全てを平らげると、ノクスの安堵する姿が目に残った。

元々食が細く、ここに来るまでに一回り痩せた。

「心配をかけてすまない」

ぽつりと漏らせば、いいえと言いながらノクスはそっと目を伏せていた。食事をとったあとは寝る支度を整え、侍従も早々に下がらせた。

周りに誰もいなくなると、暖かいはずの部屋の空気が一気に冷えていく。窓から見える外は、一

面の白。空からは絶えず羽毛のような雪が降っている。

今頃、王都では青空の下で木々に花々が爛漫と咲き誇っているだろう。

芽吹いたばかりの柔らかな芝生の上に寝転んで、風に舞う花びらを眺めるのが好きだった。もう二度とあんな日々は訪れない。

ぎゅっと胸が痛み、厚い硝子のはまった扉を開けて露台に出た。

たちまち身を切るような寒さが肌を刺し、手のひらにも髪にもどんだん雪が降り積もる。寝衣に上掛けを羽織っただけの姿では、あつという間に体温を奪われた。

——このまま儂くなってしまうばいのに。

凍宮での日々には何の希望もなく、この先自分が生きる意味もない。この雪の中に消えてしまつたら、全てが楽になるような気がした。

冷たさが痛みに変わり、さらには手足の感覚さえ鈍くなり始めた時。いきなり後ろから肩を掴まれた。

「……アルベルト殿下、なにをなさっておいでです」

押し殺した声に後ろを振り向けば、大きく心臓が跳ねた。

「っ！ ヴァン……テ……」

冷えた唇が上手く動かない。

「雪の中にこんな薄着で出るなんて！ ここを王都だと思いか!？」

クリストフ・ヴァンテル。ロサーナ王国の宮中伯筆頭。

——なぜ、お前がここにいる？

私は幻覚でも見ているのか。王都で氷よりも冷たい言葉を投げつけてきた男と対峙しているなんて。

——……まさか、この最果ての地まで追いかけてきたというのか。

北の守りの要、勇猛で名高い北領騎士団と広大な所領を持つ男。ロサーナを導く一つ星が、身じろぎもせず露台に立っている。

流れる銀糸の髪が白皙の美貌を縁取り、冬の湖のように底知れぬ青を宿した瞳には怒りがあつた。呆然と見つめていると、ヴァンテルは私の体を抱きかかえた。

バン！ と大きな音を立てて露台との境である扉が閉まる。すぐに暖炉の前に連れていかれ、毛足の長い敷物の上に下ろされた。

凍りかけた髪の中からぼたぼたと雫が落ち、溶けた雪で体はぐっしりと濡れる。手足に感覚が戻るにつれ、ぞくぞくと寒気に襲われる。

ヴァンテルはすぐさま、続き部屋から乾いた布を何枚も取ってきた。なんにも言わず私の濡れた髪や体を拭く仕草は、まるで壊れ物を扱うように丁寧だった。

「なぜ、お前が……」

「このままでは、お風邪を召します」

「……風邪？」

驚きのあまり、私は思わずぼかんと口を開けた。

「なにを言う。……まるで、心配しているような口をきく」

私の言葉に答えることなくヴァンテルは言った。

「殿下、お召し替えを」

言われた言葉の意味がわからない。よく見れば、ヴァンテルは着替えも用意していた。

「聞こえませんか？ 濡れた服などいつまでも身につけているものではありません」

「無礼なことを！ 侍従はもう下がらせた。……自分でやる」

……つくしゅ、くしゃん、と立て続けにくしゃみが出た。その途端にぐいと体を引き寄せられる。さらさらと流れる銀の髪が頬に触れ、顎に手がかかった。あっと思つた時には、柔らかなものが唇を掠^{かす}めていた。

「な！」

「ほら、こんなにお体が冷えている」

目の前が一瞬白くなり、湧き上がる怒りで頭の奥が痛む。

——どれほど人を馬鹿にしているのか。

渾身の力を込めて胸を押ししても、鍛えられたヴァンテルの体はびくともしない。

「私が侍従の代わりを務めましょう」

ヴァンテルはそう言うって体を離し、前で結んだ上掛けの紐^{ほひ}を解いた。たつぷりと水を吸つた上掛けはすぐに床に落ち、寝衣だけの姿になる。いつの間にか寝衣までが水を含んで肌に張りついていた。

寝衣姿を人に見られるなど、肌をさらすのと同じことだ。羞恥^{はづ}のあまりに頬が熱くなる。思わず両の腕で体を抱きしめると、ヴァンテルの手が肩に触れた。

「やめろ、クリス！」

思いきり声を出せば、ぴたりと男の動きが止まった。

「……名を呼んでいただけでは光栄です」

何の感情もない声がして、静かに見下ろされる。

「それだけ叫べるのなら、大丈夫でしょう。私は隣の部屋におります」

ヴァンテルは小卓の上の着替えを手で示し、続き部屋の扉に向かって歩き出した。

——なにを考えている。

体が小刻みに震え、崩れそうになる。涙を見せることだけはしないと必死に歯を食いしばった。震える手で濡れた寝衣を脱ぎ捨てて、乾いた衣を身につけた。体温が戻るのとは逆に、心はどこまでも凍りついていく。

少し経って、続き部屋から声がかかった。黙っていると勝手に部屋の扉が開く。立ち尽くす私に、戻ってきた男は優雅に腰を折って礼をとる。

「王都より到着されたと聞き、急ぎ参上した次第です。突然お訪ねした無礼をお許しください。北の大地を預かる者として、心より歓迎申し上げます」

返す言葉などにもない。ただ睨みつけることしかできない。冬の湖よりも青い瞳の中に、ちっぽけな自分が映っている。

ヴァンテルと視線を交わしたのはどれほどの時間だったか。

静かに扉が閉まり、一人になった途端に体の力が抜けた。隣室の寝台までのわずかな距離によるめき、どさりと頭から倒れ込む。

あの日、宮中伯たちの前でお前は言った。

『アルベルト殿下。貴方の些細なお力では、我がロサーナを御することはお出来にならない』

まるで罪人のように騎士たちに両腕を掴まれ、自室に閉じ込められた。自分の足で必死に歩もうとしていた者の心は、跡形もなく打ち砕かれたのだ。

ヴァンテルに会いたくなかった。

裏切られた悲しみも、全ての努力を否定された悔しさも忘れたかった。

……なによりも、子どもの頃から慕っていた心を引きちぎって捨ててしまったかった。

頬を熱いものが流れ落ちる。止めようと思っても、あとからあとからあふれてくる。眠ってしまったら、この苦しさから逃げる事ができるだろうか。

泥のように重い体には、押し寄せる闇だけがただ一つの友だった。

目覚めた時には、夜明けの寒さがひっそりと部屋の中に入り込んでいた。

漆黒の闇が少しずつ群青に変わり仄白い明るさを運んでくる。

泣きながら眠ったせいか瞼が重く、ぼんやりと腫れていた。王都では一人目覚めて身支度を整えることもあったのに、体が重くて着替えることもできない。

「お目覚めでいらつしやいますか？ ……お顔の色がよくありませんね」

盥に湯を運んできたノクスが、私を見て気遣わしげに眉を寄せた。着替えを手伝うよりも先に、失礼をと述べて額にそつと触れる。

「発熱されています。医師をお呼びしましょう」

侍従は、私が今日は一日中寝台の中にいると判断したようだ。

空気を入れ替え部屋着を用意し、医師の手配をする。てきぱきと仕事をこなす姿を感心して眺めた。

王宮の侍従たちは貴族の家柄に連なる者ばかりで、それぞれに親や兄弟が王都にいる。何人もいた侍従の中で彼だけが、凍宮行きを希望した。

自分には妻子や親族がないのでこの言葉に胸が痛んだが、同時に共に来てくれる者がいることに安堵した。

横になっていても次第に寒気が増し、体を起こすことは無理だった。ノクスは暖かな上掛けを何枚も用意して、乾いた口に吸い飲みの水を運んでくれる。

心地よい眠りには誘われず、ますます喉が痛む。これ以上熱が上がればきつと、骨が軋むように痛むだろう。幼い頃からよくあることだった。

眠りに落ちる直前、口さがない貴族たちの言葉を思い出した。

『第二王子は、ものの役に立たぬ』

私は正統な王妃の子であったので、王位の継承順位だけは高かった。それでも生まれた時から病

気がちな王子など、何の役に立つだろう。兄である王太子の代替品にもならぬ身だ。

四歳の誕生日を迎えると、王宮の最も端にある離宮、小宮殿が与えられた。亡き王太后が夫の死後を過ごした宮は、木々と花々に囲まれている。そこで私は書を読み楽器を嗜み、庭を歩いた。熱が出ない時だけは少しの遠出も許された。

病弱な体の静養が小宮殿へと移る理由だったので、宮を訪れる者はごくわずか。

母は時折やってきては、幼い私を胸にしっかりと抱きしめてくれた。そして、小さく呟くのだ。

『不憫な子』と。

母の細くて白い手と柔らかな頬が好きだった。たとえば、側仕えたちに急かされてわずかな時間しかそばにいられなくても。

最も小宮殿を訪れたのは七歳上の兄だった。二人きりの兄弟だったからか、兄は私に愛情を注いでくれた。熱が出たと聞けば、すぐに小宮殿を訪れる。病の罹患を恐れて人々が面会を止めても、笑い飛ばして気にしない。

『私はロサーナの王太子。次代の太陽となる者だ。たかだか弟の病一つが、この身にどんな仇をなすと言うのか』

兄は私のために、体によいと聞くものを探しては持ってきた。

あれは十一の時だったか。高熱にうなされる私に、美しい黄金色の蜂蜜を差し出した。

『アル、これをお飲み。すぐに楽になる』

兄の持つてきてくれた甘い蜜は、なによりも嬉しかった。一口飲めば喉の痛みが消え、二口飲め

ば熱が下がる。翌日には床から起き上がった私に、兄は歓喜した。

『熱が出なくなったら遠乗り连接到いく。だから、早く元気におなり』

大きな手で頭を撫でられ、頬ずりされる。嬉しくて、逞しい体に抱きついて何度も頷いた。

「……ねえ、兄様。あれはやっぱり嘘だったんだね。兄様が落馬して亡くなるなんて」

兄は乗馬の名手だった。愛馬のブラオンだって国一番と呼ばれた馬だったのに、あんなひどい最期を遂げるわけがない。

「ずっと、来てくれるのを待っていたんだよ。もう一度ブラオンに乗せてくれるって言った。風と一緒に、どこまでもお前の好きなところに駆けてやるって……」

微笑んだ兄が私の額に口づける。優しい仕草が嬉しくて、安堵の涙を流した。

そうだ、兄がいたら重い冠なんて被らなくていい。あれは兄のもの。元々自分が受け取るはずもないもの。

とろとろと眠っては目覚めることを繰り返す。熱のせいかな、夢と現はひどく曖昧だった。

びっしょりと汗をかいて朦朧としていると、誰かが服を着せ替えてくれた。汗でべたつく肌を濡らした布で清めてもらい、小さく息を吐く。

不意に懐かしい蜜の味がした。

唇が震えて上手く飲み込めないでいると、誰かが匙で少しづつ舌の上に乗せてくれた。しかし、それすらもするりと口の端からこぼれていく。

「す……まな……ご」

兄の持参する蜜は大層貴重なものだと言った。

『王太子殿下はいつもお持ちになるけれど、あの一瓶でどれほどの……』
以前、そう漏らした侍女の言葉に驚き、兄に尋ねたことがある。

——兄様、あれは滅多に手に入らない大切なものなのでしょう？ ぼくがもらってしまってもいいのかな……

兄は、お前が気にすることはないと笑った。

濡れた口元が拭われ、柔らかなものが唇を塞ぐ。口移しで運ばれた蜜と水とが混じり合う。喉を甘みが通りすぎ、ゆつくりと体に染みていく。小さく息を吐けば再び唇を食まれて、甘露が少しづつ与えられた。

誰が自分に口づけているのだろうと、まるで他人事のように考えていた。

——すぐに楽になる。

優しい言葉が囁かれ、熱い体に再び眠気が押し寄せる。今度こそ本当に、ぐっすりと眠ることができた。

発熱して寝込んだ日から三日が経った。

寝台から体を起こすのもやつとの私に、医師は長旅の疲れが出たのだろうと言う。

何とか立ち上がり、鏡に映る自分の姿にぞっとする。頬はこけ肌の色は青白く、これではまるで幽鬼のようだ。銀に近い金の髪はますます色をなくしている。このまま命を失っても誰も驚きはし

ないだろう。

窓掛けの間から白い光が漏れている。一步一步ゆつくりと歩いて窓の近くまで行き、重い布を掴んで外を見た。

陽は高く昇り、眩しい一面の白が目に入る。どこか青みを帯びた雪は美しく、陽光を受けてきらきらと輝いている。あの中に入れば自分まで美しくなれるだろうか。

窓に手をかけた時だった。

「起き上がれるようになったのはよろしいですが、外には出られません」

「ヴァンテル」

低く深みのある声でした。振り返れば、美しい男は流れるような動作で私の腕を取る。

「ずっと眠っていたのに、急に動かされてはまた元に戻ります」

あつという間に抱きかかえられて寝台に運ばれる。これでは先日と同じだ。

「お前、いつ部屋に入ってきた？ 私には自分で歩ける足がある！ 幼子でも姫でもないのに、何の戯れだ！」

腕の中で暴れても罵っても相手には何の効果もない。つまらないものを見るかのように、冷たい青い瞳が向けられる。

「年頃の令嬢、いや幼子の方が貴方よりもよほど抱き心地がいい。もつとしっかり、体に肉をつけなければ」

言われた言葉に、かっと頬が熱くなる。悔しさが胸に湧いたが、真実だと思えば言い返すことも

できない。

今の自分は腕も足も肉が失われ病人そのものだ。まるで壊れ物のように、そっと寝台に横たえられた。情けないが、寝転がったまままで声をかけた。

「一体何の用だ、ヴァンテル」

「大切な主君の見舞いに参りました。お体の御回復をこの目で見なければ安心できませんので」

「……主君？」

思わず、嘲笑うような声が出た。

「なにをふざけている。お前たちが次代の王と仰ぐ者は、もはや私ではない」

「誰がこの国の王となるかは、また別の話です。今は私が主君と仰ぐ方のことを話しております」
聞いているうちに、押し殺していた怒りがふつふつと湧き上がった。

貴方では力不足だと宮中伯たちの前で言い放った男が、同じ口で主君だと言ってくる。茶番に付き合えとでも言うのだろうか。

「……私はお前になにをした？」

「アルベルト殿下？」

「お前がわざわざやってきて、そんな辛辣な言葉を投げるのは……きっと理由があるのだろう。小宮殿に閉じこもって、ろくに人と付き合うこともしてこなかった。自分では必死だったが、私の行いはお前たちの意に染まぬことも多かったのだろうか」

「はいちやく 廃嫡を宣言された、あの日。」

宮中伯たちは誰も私の言葉に耳を傾けなかった。

彼らを蔑ろにしたつもりはないが、懇意にもしてこなかった。自分のことだけで精一杯だったのだ。対話を重ねていればもつと違う道があったのか、いくら考えても答えは出ない。

「殿下は、私たちが望んだとおりの方でした」

「どういうことだ？」

「貴方は賢く公平で愛情深い。努力することを惜しまず、人に誠意を貫こうとする」

「それは私のことか？ 兄ではなく？」

ヴァンテルの美しい顔が歪み、ぞつとするような微笑を湛たえる。

「あの方は、貴方が思っているような人間ではない。貴方はなにも御存知ない」

兄を侮辱された怒りよりも、最後の言葉に血の気が引く。

そうだ、私はなにも知らなかった。そうして全てをなくしたのだ。

「出ていけ！」

声の限りに叫べば、わずかにヴァンテルの眉が顰ひそめられる。私たちの間の空気は、重く凍りついていた。

——この地に来た理由を思い出せ。

私は小宮殿で過ごした日々のように静養に來たわけではない。最果ての地に追放されたのだ。ヴァンテルが表情を消したまま非礼を詫わびる。彼が部屋を出た扉の音だけが、いつまでも耳に重く響いていた。

「出ていけ」とヴァンテルに向かって叫んだ日から一週間。

あれから彼は凍宮に現れない。

自分の言葉が原因だとは思えなかった。元々ヴァンテルが凍宮を訪れたのは、所領の視察と私の到着とが重なったためだろう。今は、久々の帰郷で忙しいに違いない。

ロサーナ王国の政は宮中伯たちの合議で決定され、王が承認する。

多岐に渡る政務を担当する宮中伯たちは、領地を信頼のおける家臣に任せながら、自身は王都で暮らすのが常だ。本来の爵位とは別に、王の命じる任を持つ宮中伯は十二名。彼らの生きる場所は花の都、王都フロイデンにある。

レーフェルトは、王都と対極にある雪と氷に囲まれた追放の地だ。それでも、窓から見える風景は絵画のように美しい。

料理人の心尽くしの料理と甲斐甲斐しい侍従の世話は、私の体を回復させた。起きている時間が長くなるにつれ、少しずつ凍宮の中を歩き回れるようになった。

「殿下。公爵閣下からの贈り物です」

「……今度は、なにを贈ってきた」

侍従のノクスが銀の盆を捧げ持つ。姿を現さない本人の代わりなのか、このところ毎日のようにヴァンテルから貢物が届いていた。

最初に贈られたのは、北の領地で産出される希少な宝石を使った装飾品^{ジュエリー}だった。届いた日はヴァ

ンテルを怒鳴りつけた翌日で、機嫌を取ろうとしているのかと腹が立った。すぐさま送り返し、なにもいらないと伝えた。それでも翌日には別の品が届いた。

数日そんなやりとりを繰り返し、業を煮やした私は手紙を書いた。どうしてもなにか贈りたいのなら、一日の中でお前の心を動かしたものを贈れと。

ただの意趣返しのもりだった。

最果ての宮殿に閉じ込められた者に甘い餌など必要ないだろう。こちらもそんなもので気をよくしたりはしない。

昨日はなにも届かなかったので、ようやく諦めたのかとほっとしていたのだ。だが、ノクスが捧げ持った銀の盆には白いものに乗っている。

「今年来たばかりの渡り鳥が落とした羽根だそうです」

白い羽根の先には細かい光沢がある。私は光の射す窓の近くに持っていき、何度も目の上にかざした。きらきらと輝く羽根は様々に色が変わり、まるで陽を浴びた朝露のように美しかった。

ほう、とため息をついたあと、思わず声を上げて笑った。

……宮中伯の筆頭ともあろう男がこれを？

どこで見つけたのだろう。自ら探しに行ったのだろうか。私の言葉を、あのヴァンテルが真摯に受け入れたというのか。

「殿下？」

ノクスが目を丸くしている。

「どうした？」

「失礼を。殿下がお笑いになったのを初めて拝見しました」

「……そうか」

確かに長いこと、笑ったことがなかったような気がする。前に笑ったのはいつだったのか。

「これは、どこに行ったら見られるんだろう。ヴァンテルの所領にある湖にやってくるのだろうか？」

渡りをする鳥たちは、毎年決まった時期に同じ場所に来ると聞く。美しい羽をもつ鳥たちが、何羽も湖に飛来する姿が心に浮かぶ。

一瞬、ヴァンテルに礼の手紙を書こうかと思ったが、思い止まった。たまたま彼の目についただけかもしれないのだ。ただ、その鳥の羽根を返そうとは思わなかった。私は初めて「確かに頂戴した」との返事を侍従に託した。

それ以来、ヴァンテルからは人が見たら目を剥きそうな贈り物が届いた。

まともな形ならぬ水晶の欠片、繊細な網目のようになった葉脈ばかりの木の葉。小さな紙に書き写された詩が何枚も、くるりと紐で結ばれていたこともある。

美しい鳥の羽根が贈られてから十日目。

ノクスは貢物の代わりに、ヴァンテルからの手紙を運んできた。それは、急ぎ王都に向かうため、挨拶もなく旅立つ非礼を詫げるものだった。元々が宮中伯たちの筆頭である男だ。北の地が所領とはいえ、長く王都を留守にしていいいわけもない。

手紙の最後には、どうかお体を大切に、と書かれていた。もうなにも受け取ることはないのだと思つた時、ひんやりとした風が心を撫でていった。

不意の客が訪れたのは、ちょうど凍宮に来て二か月を迎える頃だった。

宮殿長が困惑しながら部屋にやってきた。

王都から内密に訪れた者がいる。しかも、私への取り次ぎを願っていると。先触れもない突然の訪問に目を瞠った。

普段使われることのない応接室で待つっていると、見事な体軀の美丈夫と二人の従者が入ってくる。思わず長椅子から立ち上がった。

「エーリヒ！」

「アルベルト殿下！」

エーリヒ・ライエン。ロサーナ王国の十二人の宮中伯の一人だ。武門の名家である公爵家の嫡男で、自ら騎士団を束ねている。彼は見事な栗色の髪に意志の強い瞳を持っていた。鍛えられた体に輝く笑顔は、まるで春の陽射しのように暖かい。

ライエンと従者たちは揃って跪き、額を床にこすりつけるようにして深い礼をした。

「この度の我が身の不忠、もはや何の申し開きもできません。殿下の御無念いかほどかと言葉もございませぬ」

廃嫡を告げられた時、彼はもう一人の宮中伯と共に隣国に赴いていた。

長年の懸案事項である国境の紛争が激しくなり、内々に折衝の場が設けられたのだ。度重なる領土への侵犯は、宮中伯を二人も赴かせる大きな事態となっていた。

「トベルク殿と帰国した時には、殿下の廃嫡の件は全てが終わったあとでした。既に凍宮に移られたと聞き、我が耳を疑いました。私たちがだけがなにも知らなかったのです」

フランツ・トベルクは代々宮中伯を務める侯爵家の出で、外交に強く王の信頼も厚い。廃嫡はいちやくの請願書に署名しなかった宮中伯は、ライエンとトベルクの二人だけだった。

「二人でいくら抗議しても、もはやどうにもなりませんでした。あまつさえ、決定に不服があるのなら、全ての宮中伯の同意を得ると言い出す始末です」

聞かなくてもわかっている。そんなことを言い出したのはヴァンテルだろう。

「エーリヒ、ありがとう。よくこんな遠くまで会いに来てくれた」

思わず、王都で共に過ごした時の心安い口調で話してしまう。

ライエンは宮中伯たちの中では最も年若く、ヴァンテルと共に私の相談役だった。何でも明るく冗談を交えて話す彼に、どれだけ心を和ませてもらったことだろう。

「……殿下」

瞳を潤ませながら、ライエンが言う。

「このような最果ての地に、殿下を閉じ込めるようなことがあってはなりません。お体のためには、フロイデン、いや、もっと過ごしやすい気候の土地がよいのはわかりきったこと」

確かに以前からそう言われていた。

王都フロイデンは常春と謳うたわれる温暖な地だが、高地にあった。すぐに体調を崩す私に、侍医たちは同じ南方でも低地での静養を勧めてきた。低地の方が呼吸が楽になるからと。……兄は私が王都から出ることに、決して頷かなかったが。

「殿下、南には我が領地が多くございます。たとえ王都にお帰りにならずとも、我らの地においてください。城の一つや二つ、いくらでも御用意しましょう」

ライエンの言葉に、すぐには返事ができなかった。

「お心をお決めくだされば、明日にでもお連れ申し上げます」

「……エーリヒ、すまない。ちょっと混乱してしまって」

動揺しながらライエンを見つめる私に、彼は憐れむように言った。

「御無理もないことです。突然の申し出をお許しください。一月前、私はなにも知らずにロサーナに帰国しました。殿下への無体な所業を聞いて、いても立ってもいられませんでした」

隣国から戻ったライエンは、私が廃嫡された事実を知り烈火のごとく怒った。トベルクと共に他の宮中伯たちに異議を申し立てても、もはや済んだことと埒らちが明かない。

昨日今日で、王太子の廃嫡はいちやくが決まるわけもない。それは即ち、長い間自分たちだけが話の外にいたということだ。

国の大事を決める話から疎外されていた事実は、二人の宮中伯に衝撃を与えた。このまま王都にいてもなにも進展しないと、ライエンは凍宮に駆けつけたのだ。

「おそらく、私たちを隣国との折衝に赴くよう仕向けたのも、廃嫡はいちやくの決議に参加させぬためでしょ

う。協定が結ばれたあとにも新たな国境の視察を宮廷から要請され、すぐには帰国が叶いませんでした。腸が煮えくり返るとはこのことです」

「……宮中伯たちは誰一人、私の言葉を聞いてくれなかった。もつと彼らと親交を持ち、遠慮なく国の明日を語ればよかった。ただ、彼らが口にした罪は全て身に覚えがないものだった」

「仰る通りにございます。トベルク殿と共に罪状を拝見致しました。殿下があのような罪を重ねられるわけもない。何年かかろうとも、私が殿下の名誉を回復して御覧に入れます。どうぞお心を強くお持ちください」

「エーリヒ……」

思わずライエンの手を取った。温もりが手に伝わり、優しい眼差しに目の奥が熱くなる。彼の瞳には、ゆるぎない忠節があった。

ひとしきりライエンと話したあと、自室に戻って長椅子に座り込んだ。ライエンたちは数日を凍宮で過ごし、再び王都に戻る。それまでにできれば、よい返事が欲しいと言う。

窓掛けは大きく開けられ、硝子越しに外の風景が見える。先ほどまでは雲の隙間から陽光が見えていたのに、いつの間にか空はぶ厚い雲に覆われていた。

曇天から羽毛のような雪が降ってくる。ここに到着して初めて露台バルコニーに出た時も、たくさんの雪が舞っていた。真っ白な雪の中に消えてしまいたい、どれだけ思ったことだろう。

「殿下、公爵閣下からです」

振り返ると、ノクスが頭を垂れて銀の盆を捧げ持つ。盆の上には一輪の薔薇があった。

「この寒さでも薔薇が咲くのか」

「北領でも珍しい、冬に咲く薔薇だそうです。今年一番に咲いた花をお届けせよと、王都から手紙が来たとか」

青々とした花の茎に手を伸ばす。棘は全て折られ、花びらは露を含んでいた。庭師が丹精込めて育てたのだろう。天鵝絨のような光沢と艶を含んだ花びらは、雪のように白い。

「……何の気まぐれか。一体、いつまで続けるつもりなのだろうな」

驚いたことに、ヴァンテルからの貢物は続いていた。さすがに毎日ではなかったが、凍宮近くにある公爵家の屋敷から執事が自ら運んでくるのだ。

「まさか、フロイデンに発ったあとも贈ってくるとは」

「殿下に贈る物を言い残していかれたそうです。フロイデンから贈られる時もあるようですが、そう言えば、時折懐かしい王都の香りのする品がある。

先日贈られたのは、花を練り込んだ小さな砂糖菓子だった。ヴァンテルもこんな愛らしい菓子を食べるのかと驚いたが、あれは王都で見つけたものだったのか。

部屋の棚に並んだささやかな贈り物たちを眺めるのが、いつしか日々の楽しみになっていた。そんなことを知る者は、自分とこの侍従しかいない。

ライエンの言葉が耳によみがえる。

「たとえ王都にお戻りになれなくても、我が領地に……」

窓のすぐそばに立って外を見た。絶え間なく降る雪は全てを覆い尽くす。悲しさも悔しさも全て、

雪の下に沈んで見えなくなっていく。

……ここから抜け出して南に？

降り続く雪をいくら眺めても、答えは浮かばなかった。

普段訪れる者のいない凍宮に宮中伯が訪ねてきたのだ。静かな宮殿の中は、ひと時の賑わいを見せた。

遠路はるばる訪ねてきた客人に、なにか力のつくものを。

侍従を通してそう伝えると、料理人はこぞとばかりに腕をふるった。

晚餐の席でライエンは舌鼓を打ち、出された料理を褒め称えた。料理人を自ら呼び寄せて労をねぎらおうとしたが、料理人は御前に出るような身分ではないと固辞する。

折角だからと私からも声をかけると、ようやく姿を現した。ライエンは、姿を見せた料理人を見て目を瞠みはった。

「お前は！ マルク！」

「お久しぶりでございます、閣下」

料理人がライエンに向かって深々と礼をした。不思議に思つて尋ねると、以前ライエンの祖母の屋敷で働いていたことがあると言う。

「我が親族にマルクの考案した料理を食べて病が改善した者がおりました。祖母は彼の料理を大層気に入って、自分の屋敷に引き抜いたのです」

料理人のマルクは薬師の家系に生まれ、食は薬に通じると研鑽を積んだ男だった。

「祖母が亡くなったあと、屋敷を去つたと聞きました。どこの貴族に召し抱えられたかと思つていましたが、まさか凍宮にいたとは」

マルクはなにも語らず頭を垂れた。

食の細かった自分が、凍宮に来てからは食事をしっかりとるようになっていた。それは、体調に合わせて工夫を凝らした料理が出てきたからだ。どんなに食欲がない時も、マルクの作るスープだけはするりと喉を通つた。

「ありがとう。そなたのおかげで今までになく体が動かせるようになった。まさに食は薬だな」

私の言葉に、料理人が頬を赤く染める。ライエンがあとで褒美を取らせましょうと言つて微笑んだ。

晚餐の席はいつになく華やいだ楽しい時間となり、その夜は上手く眠れなかった。目を閉じても様々なことが浮かんでくる。

久々に会えたライエン。料理人のマルク。

寝返りを打つと、窓掛けの隙間から一筋の月の光が入ってきた。

寝台の隣には小卓があり、冬薔薇が一輪生けられている。闇に包まれた部屋の中で、仄かに白い輪郭が形を結ぶ。

フロイデンからの来客のせいだろうか。薔薇を見るうちに、ふわりと一人の男の姿が浮かんだ。

……今頃、お前はなにをしているのだろう。

馬の嘶きを聞いたと思ったのは、明け方だっただろうか。

不意に訪れる眠りと覚醒との狭間で、耳が微かな音を捉えた。部屋の扉が静かに開き、どこからか湿った空気が流れ込む。ひそやかな足音は敷き詰められた絨毯に吸い込まれていく。

ノクスが来るにはまだ早いのに、自分に近づく気配を感じた。

……これは夢の続きだろうか？

すぐそばに人の気配がして、ひやりと冷たいものが頬に触れる。びくりと体が震え、思わず目を開けた。

「……え？」

目の前には、厚い外套に身を包んだ男がいた。波打つ銀の髪が揺れ、深い湖の色の瞳が私を一心に見つめている。

「ヴァンテル？」

そう呟いた途端、男の腕が伸びて胸の中に強く抱きしめられた。それ以上言うことはできなかった。

息をするのも動くのも辛い。寝衣を身に着けただけの体には、ヴァンテルの外套から伝わる冷気は身を刺すようだった。

服越しに厚い胸板を感じ、自分の薄い体は強靱な腕の中で今にも砕かれるかと思えた。肩口にうつすらと積もった雪が、ぼとりと鎖骨に落ちる。肌を伝う冷たさに身を震わせると、ヴァンテル

は、はつとしたように体を離れた。聞いたこともないほど優しく、名を呼ばれた。まるで、ずっと大切に抱えていた言葉を口にするように。瞳を見開いて、大きく瞬きをした。

「……アルベルト殿下」

……無礼者、と叫ばなければいけなかった。こんな時間になにをしに来た、と叱りつけなければいけなかった。

銀色に光る髪が、白薔薇と同じように仄かに輝いたからなのか。深い青の瞳が、夜明け前の空の

ように美しいと思っただけからなのか。明けきらぬ闇に沈む部屋の中で、吸い込まれるように互いを見つめていた。

頬に手が触れ、髪を梳かれ、唇がゆつくりと重なっていく。冷えた唇に体温が移り、ヴァンテルがわずかに震えていたのだと気づいた時。自分の体から、強

張った力がゆるりと抜けていくのがわかった。どれほど抱きしめられていたのか、男の腕の中にあつた体が離される。

ヴァンテルは私の頬を両手で包み、額に口づけを落とした。囁くように言葉がこぼれる。

——貴方がここにいてくださってよかった、と。私の体を上掛けで包むと、ヴァンテルは部屋を出た。

敏捷な獣のように音も立てず、するりと扉の向こうに消えていった。訪れた者など誰もいなかった。

たかのように、部屋の空気だけが揺れている。

……きつと、これは夢だ。夢でなければ、あんなに優しい声が聞けるはずはない。窓の外が白み始めている。朝になれば全てが露のように消えるはず——
わずかに残る夜の気配を抱きしめながら、私は固く目を閉じた。

「御無沙汰しております、殿下。息災でお過ごしでしょうか」

「……変わりない」

凍宮の応接室で、私はヴァンテルと向かい合っていた。突然の訪問はライエンに続き二人目だ。動揺を抑えながら対面し、これも夢の続きなのかと叫びそうになった。

ヴァンテルは定期的に凍宮を訪ねることにしたと言う。ここでの生活に不自由はないかと聞かれ、問題ないと答えた。通り一遍の会話を重ねながら、明け方に見たのは夢だと確信した。何度見ても、端正な顔にはわずかな感情の変化すら見られなかったからだ。

はたして、予期せぬ客を迎えた昼食の席は、これ以上はないと思うほど険悪だった。

ライエンは憎々しげな態度を隠そうともしない。

「宮中伯二名が、ほぼ同時に北の最果ての凍宮を訪れる。思いもつかないことだな、筆頭殿」

「そなたこそ、隣国から帰国したばかりで休養が必要だ、しばらく宮中には参内できぬと言ってきたはずだが。休養とは、ずいぶんと遠出を指すことだな」

「宮中伯の会議に、もはや俺とトベルク殿は必要あるまい。我らがいなくてもこの国は何とでもな

るのだからな」

同じ席にいただけで胃が痛くなるような会話が続く。ヴァンテルは静かにライエンを睨みつけ、これ以上話すことはないと目で制した。だが、そんなことで怒りに燃えるライエンの気持ちが収まりはしなかった。

「何でも思い通りとは結構なことだ。ノーエ侯爵令嬢との婚約も相成って、全ては筆頭殿の思うままというわけだな」

ヴァンテルの顔色が変わったのと、私の手にした銀食器が床に落ちたのとは同時だった。ライエンがしまったと言おうように口元を覆う。

「今、何と言った？」

動揺を堪えてライエンを見れば、顔を歪めて下を向く。

「……シャルロットが？ ヴァンテルと？」

青い瞳は何の感情も映さず、ヴァンテルは一言も発さなかった。否定しないのならば、それは事実と同じことだ。

瞼の奥で金色の髪が揺れる。春の都で幸せそうに笑う少女。彼女がなぜ偽証に走ったのかわからなかった。自分のながいけなかったのかも。

だが、ようやく合点がいった。無理やり担ぎ上げられた出来ない代替品と、実力も財力も手にした有能な公爵と。どちらの手を取るべきか、彼女は天秤にかけたのだろう。

よろけながら立ち上がり、表情をなくした二人に背を向けた。彼らが椅子から立ち上がる気配に

来るな、と一言だけ命じた。

自室に戻って侍従にも伝えた。決して誰も取り次ぐなど。

続き部屋の寝室に入れば、小卓に飾られた冬薔薇はまだ美しく咲いていた。薔薇を手にも再び隣室に向かい、硝子のはまった扉を開けて露台バルコニーに出た。息を大きく吸えば、肺の奥まで凍るような冷気が入り込む。

雲は厚く、どこまでも広がって天を覆う。羽毛のような雪が髪にも肌にも降りかかり、あつという間に雪まみれになった。

手にした白薔薇の花びらを、一枚ずつ剥いでいく。

風が吹く度に雪の中に花びらが舞って消えた。手の中に残ったのは、ただ一本の緑の茎だけだった。

生はわずかに感じられるのに、なにも身に着けてはいない。まるで今の自分のようだ。

抜け殻のように無残な姿を露台バルコニーから投げ捨てた。跡形もなく雪に埋もれる姿を見つめていたら、侍従に部屋の中に引き入れられた。

「外の空気はお体に障ります、殿下」

「ヴァンテルはどうして、私に物を贈るのだろうか」

「殿下……」

ノクスが痛みを堪えるように私を見る。そっと布を差し出され、私は首を傾げた。

頬に触れ、雪で濡れていると思ったのは自分の涙だと知った。

第二章 追憶

誰の顔も見たくない。誰の声も聞きたくない。

心が悲鳴を上げている。

窓が軋んだ音を立て、風が不気味な唸り声を上げる。

外は吹雪なのに、凍宮の中には不思議なほどの静けさを保っていた。

レーフェルト凍宮は造営から長い時が経っていた。毎年のように修繕が行われていたが、昨年はいくらまでなく大規模な修繕が行われたと聞く。

偶然なのか、それとも私の廃嫡はいちやくを見越しての準備だったのか。そう考えるだけで心がどこまでも冷えていく。

廃嫡を告げた日に、ヴァンテルは言った。

「御身の今後の生活は、今までと変わらないことをお約束致します」

お前の言う今までは、いつのことだった？ 曲がりなりにも私が王太子として過ごした日々は入っていたのだろうか。

変わらない生活。そうだ、なにも変わらない。

幼い時から過ごした小宮殿。そこから、この贅を尽くした凍宮へと居場所が移った。私が尽力し

た王宮での日々はもの数にも入らず、籠かごの鳥はただ別の籠に移っただけだった。



自分のことを『私』ではなく、まだ『ぼく』と呼んでいた頃。

王宮の外れにあつた小宮殿は、私にとつて小さな樂園だった。

病弱な体で自由に動き回することはできなかつたが、無理を通されもしなかつた。誰からの期待も向けられない代わりに、時間を己の好きなままに使うことが許された。

木々が張り出して木陰を作り、花々が咲き誇る庭の片隅を、自分だけの隠れ家にしていた。

小さな噴水の周りには柔らかな芝生が生え、丈の低い茂みがぐるりと囲んでいる。芝生の上に腰を下ろせば、幼い子どもの姿はたちまち見えなくなった。

誰も来ないのだから隠れる必要もないのだが、ひっそりと囲まれた場所が好きだった。陽射しのまだ強くない季節には、決まつてそこに寝転がつて本を読む。

芝生の上を渡る風、光に反射してきらめく水。花々の蜜を啄つばむ小鳥や蝶。時には木々を渡る小さな動物たちの訪れもあつた。文字に飽きればそれらが相手をしてくれる。

代わりばえのしない、どこまでも平穏な日々。

だから、その日に彼がやってきたことは、自分の中でなにかがはっきりと変わるほど特別なことだったのだ。

兄が隣国から取り寄せたと言う貴重な本を前日にもらつたばかりだった。ページを繰る手が止まらず、夢中で読み進めた。

かさり、と茂みを擦る小さな音がする。栗鼠りすでも訪れたのかと目を上げれば、まさに本から抜け出た人物がそこにいた。

肩で切り揃えた銀の髪、凛々しい眉に通つた鼻筋。深い湖のように青い瞳が輝いている。

冒険譚ぼうけんたんの中で最後に姫君を救うのは、いつだって若く美しい王子だ。現実にいるとは思えない端正な姿が、物語と現実との境を曖昧にする。

彼が目を見開いたまま黙り込んでいたので、思わず尋ねた。

「だあれ？ あなたは王子なの？」

「……王子？ 私は、クリストフ・ヴァンテル」

ヴァンテルという名は知っていた。この小宮殿に住んでいた王太后の生家だったからだ。

「おばあ様のお家の人？」

「おばあ様？ もしや、貴方は」

「アルだよ。アルベルト・グナイゼン。……あっ！」

私は、飛び起きて両手で口を覆つた。

「むやみに名を教えるはいけないうて言われてたのに」

「どなたにですか？」

「みんなだよ。乳母にも侍従にも兄様にも！」

名を明かす機会などなかったから、気にかけることもなかった。

「……私も、貴方に名を教えてしまいました」

「え？ あ！ ……ほんとだ」

私が呟くと、美しい人は、ふふと優しく微笑んだ。

迷い込んだのです、と彼は言った。

「殿下の祖母君である亡き王太后様は、私の伯母にあたります」

祖父である先王に嫁いだのは、ヴァンテルの父の長姉だった。

「もともと、父は女子が六人続いた末に生まれた男子でした。父が生まれた時には、伯母はもう嫁いであとだったそうです」

久々に王宮に来て、伯母が住んでいたという小宮殿を見なくなったのだと言う。

「好奇心で庭だけでもと思つて散策していたら、小道を見つけました。まさか、こんな奥に繋がっているとは思いませんでした」

「ぼくはてつきり、本の中の王子がそのまま出てきたと思つたんだ……」

恥ずかしくなつて、夢中になつていた本を抱えたまま小さな声で告げた。

ヴァンテルが笑いながら言った。

「私こそ、幼い頃に読んだ絵本を思い出しました」

森の奥にある泉の脇に、ある日小さな種が芽吹く。泉は種が成長し美しい花が咲くまで、ずっと傍らで見守っていく。

ここはまるで、その本の挿絵にある風景のようだと言う。

「とても美しい本ですよ。よかつたら今度、お持ちしましょう」

わずかな時間を共に過ごした少年は、小道を何度も振り返りながら王宮に戻つていった。私は遠ざかる彼の姿をずっと見送つていた。

——あれは本当にあつたこと？ 昼間から夢を見たのかな。

首を傾げる日々が続いたが、ヴァンテルは本当に約束を守つてくれた。滅多に人が来ない小宮殿に絵本を持って訪れたのだ。

挿絵の入った本は貴重だったので、私は興奮して何度も礼を言った。

精密に描かれた絵の素晴らしさに息を呑み、見たこともない異国の文字を追う。とまどう視線に氣づいたヴァンテルが、訳しながら読んでくれた。静かな声が部屋に満ち、美しい指先が捲る世界に夢中になった。

優しい泉が小さな種を大切に見守り、やがて見事な花をつける。最後のページを読み終えて、思わず大きなため息が出た。

「花は、花は嬉しかったよね？」

「ええ。きつと泉も」

最後のページをそつと撫でた。ヴァンテルが「もう一度読みましょうか？」と言つてくれたので、私はすぐに頷いた。

結局、何度も本を読まされたヴァンテルは、侍従の用意した茶で乾いた喉を潤した。私はその間

も本を見つめたままだった。

「殿下は召し上がらないのですか？」

「うん……。もう、何だか……。胸がいつぱいだから」

「そんなに気に入られたのなら、その本は差し上げましょう」

「え？ だってこれ、大事なものでしょう？」

その時、自分が物欲しげに持っていたから、ヴァンテルが気遣ってくれたのだとわかった。母の戒めを思い出す。

『臣下のものを欲するような、浅ましい真似をしてはなりません』

急に恥ずかしくなつて本を差し出すと、小さな笑い声を聞いた。

「それは元々、殿下が気に入られたのなら差し上げるつもりだったのです」

何と答えていいかわからずに黙っていた。すると、悪戯いたづらそうな目をして彼は言った。

「では、私とその本を読みたくなったら。またこちらに伺つてもよろしいですか？」

絵本を胸に抱えたまま何度も頷いた。

初めての客に興奮した私はその夜、熱を出した。乳母にも侍従にも、熱を出したことを誰にも言わないでほしいと頼んだ。発熱が理由で彼に会うことを禁じられるのが怖かった。

——熱を出さなければ、また来てくれるかもしれない。

寝台のそばの小卓に本を置いてもらい、眺めながら眠った。

ヴァンテルはその後、小宮殿を度々訪れるようになった。

互いに本を読んだり、ヴァンテルの持参した珍しい玩具で遊んだり、二人で過ごす日はあつという間に時が過ぎる。いつの間にか、互いをクリス、アルベルト様と親しく呼び合うようになった。

「あのね、不思議なことがあるんだ」

「何ですか？」

「クリスがここに来てくれた時は、いつもふわつと胸が温かくなるんだ。母様や兄様がいらした時とは、ちよつと違う」

「……………そうなのですか？」

ヴァンテルの青い瞳がぼちぼちと瞬またたいた。

「うん。母様はたまにだけど、兄様は熱が出るとすぐに来てくださる。嬉しいけど、ぼくはいつも起きられないから悲しくなつて……。いつの間にか嬉しいのと悲しいのが混ざつて一緒にいたいな気持ちになるんだ。兄様を見ると、ああ、また熱が続くんだったなと思う。遠乗りの約束もしてくださるし、それはいいんだけど……」

夢中になつて話していると、なかなか言いたいことに辿り着かない。そんな子どもの話を、ヴァンテルは急せかさずにじつと聞いてくれる。

「でも、クリスはね。ぼくが庭にいる時に、そつと来てくれるでしょう？ 元気な時だし、会えたらとても嬉しいんだ。それに、また会えるかなつて思う時間もすごく楽しい」

思わず一息に話してしまつて、ふうと息をつく。

ヴァンテルの手を取って、自分の頬にぺたりと当てる。ほっそりした指は思ったよりも冷たくて「ひゃっ」と声が出た。目を丸くする彼に、おかしくなって言った。

「ほら、クリスマスと話すだけで、こんなにあったかくなる」

ひんやりしていた手に、たちまち熱が移っていく。ヴァンテルがふわりと微笑んだ。

——クリスマスもぼくのように嬉しいのかな。そうだったら、いいな。

「アルベルト様は私というと、嬉しい……ですか？」

「うん！ とつても！」

ヴァンテルが笑った。声を上げたりはしないけれど、とても楽しそうに笑う。それは、まるで花が咲いたようにきれいだ。うつとりしながら言葉を続けた。

「でもね。クリスマスが帰る時はね、すうって風が吹くみたいに寒くなるんだ」

「風が？」

ヴァンテルの手を、今度は自分の胸に当てた。

「ここがね、すうすうする。あつたかい上掛けを急に剥がれた時みたいに、何だか泣きたくなるの」

「……それは」

ヴァンテルは迷っていたが、少しだけ目を伏せて教えてくれた。

「寂しい、と言っんですよ」

「さびしい？」

少年のヴァンテルが、戸惑う子どもの瞳を見て頷く。

本の中でたくさん読んでいた言葉だった。でも、その意味までは理解していなかった。扉にちやりと鍵がはまるように、言葉は心の中に居場所を見つける。

その日初めて、「寂しい」という言葉の意味を知った。



遠い日の夢から覚めた時には、日は既に暮れていた。

部屋の中はしんと静まり返り、私はずっと眠っていたのだとノクスが教えてくれる。彼は私の言葉を守り、二人の宮中伯の取り次ぎを一切拒んでいた。

心にはもう、なにも残っていないかった。温かな思い出も、明日を信じて励んだ日々も。雪と氷に囲まれて暮らす今、全てが心の奥に沈んでいく。

見るともなしに見た小卓の上にはなにもない。薔薇の残り香すらも、感じられはしなかった。

「ヴァンテルと二人だけで話したい」

私の言葉にノクスはすぐに頷いた。

ヴァンテルは凍宮近くの屋敷に戻らず、まだ宮殿内に留まっていた。応接室で待っていると、私の顔を見るなり眉を顰める。

「あれから、なにか少しでもお召し上がりになりましたか」